

「キノコに生える菌類」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

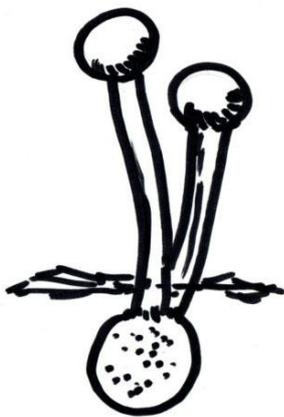
キノコやカビといった「菌類」は、顕花植物やシダ、コケのように、葉緑体を持って、自ら栄養分を作り出すことはしない。樹木、土壌などから直接栄養分を摂取し、それを分解して再びさまざまな物質を生産、菌糸や子実体(キノコ)を形づくっている。

中には、セミの幼虫に寄生する「セミタケ」、ジクモの巣に寄生する「クモタケ」、死んだ動物の骨に発生する「ホネタケ」など、よくもまあこんな相手を見つけましたね・・・という菌類もある。



中には「キノコに生えるキノコ」というものもある。左図(田中画)は、「ヤグラタケ」といって、「クロハツ」というキノコの傘の上だけに発生する。櫓のように見えるので「櫓茸」という。私は実際に見

たことがあるが、ほとんど腐って崩れそうになったクロハツに発生しており、すでに胞子を散布し終わった菌体への発生なので、「寄生」ではなく「腐生」と呼ぶべきだろう。



完全に「寄生」するものもある。これは「タンポタケ」というキノコ。タンポとは、拓本に使う布を丸めた道具だ。タンポタケは、地中に潜む「ツチダンゴ」というキノコにだけ発生する。生きてい

るキノコに生えるキノコなので、これは「腐生」とは言えず「寄生」である。ほかにも「タンポタケモドキ」「ハナヤスリタケ」なども、同類の寄生菌である。



「キノコに生えるカビ」というものもある。写真は朽ち木に発生した小さなキノコ。種名まで同定できなかったが、チシオタケの仲間だろう。このキノコは朽ち木の成分を養分として育てている。



近づいてよく見ると、キノコの傘の上にカビが発生している。これも胞子を散布し終わった大きな傘のものからカビが発生している。これも「寄生」ではなく「腐生」と言えるだろう。



カビは成長が速い。翌日にはハリネズミになっていた。このカビにとっては、朽ち木を分解して養分を得るよりも、すでに菌体になったキノコから養分もらったほうが効率が良いのだろう。賢い菌類だと思う。